Aoyama Gakuin Archives Letter

青山学院資料センターだより25号

青山女学院 代官山校舎 1922（大正11）年

1888（明治21）年から40年の期限付きで青山学院の借地に校舎を構えていた青山女学院は、自分たちの土地を持ちたいという思いから校地を探し求め、WFMS（メソジスト監督教会婦人外国伝道会社）などからの多額の寄付もあり、今から100年前の1922（大正11）年に念願が叶い、代官山に校舎を開校することができた。
右の写真はその献堂式の様子。（後方左より小方仙之助理事長、ミス・スプロールズ青山女学院院長）
しかし、翌1923（大正12）年の関東大震災により代官山校舎は倒壊してしまう。その後の震災復興を通じて、1927（昭和2）年に青山学院と青山女学院は合同することとなる。

青山学院史探訪
受験からみる青山学院―『高潮』の検討をとおして― 日向玲理―2

資料センター所蔵資料紹介
出会いの場となった児童雑誌『日曜世界 コドモノトモ』山本美紀―4

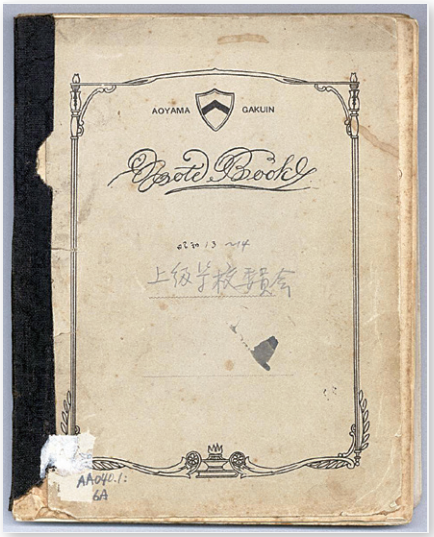
資料センター利用状況・日誌抄―6

受入れ資料―7

利用案内ほか―8

受験からみる青山学院 －『高潮』の検討をとおして－

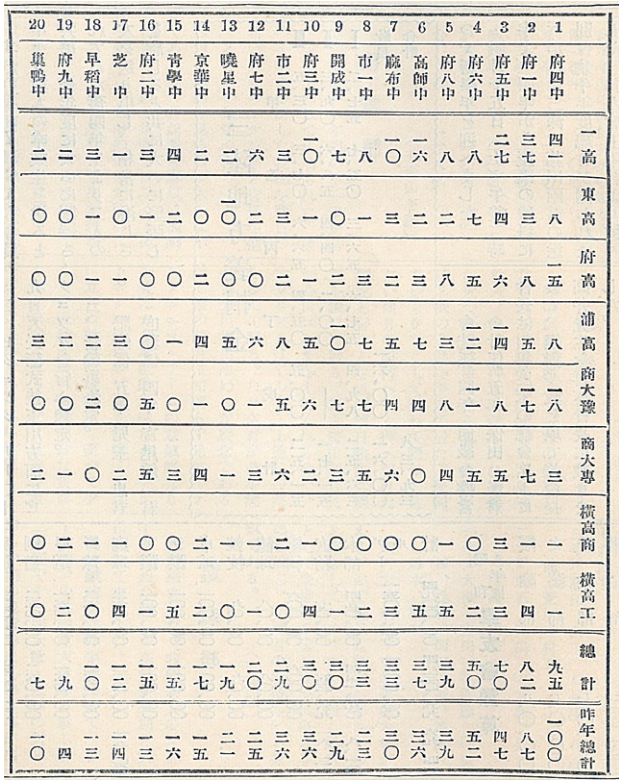
大学附置青山学院史研究所助手　日向　玲理



「昭和13～14 上級学校委員会」

表紙に「昭和13～14 上級学校委員会」と書かれた一冊のノートがある。手に取ってページを繰っていくと、夏期講習会、受験座談会といったどこか懐かしい響きの言葉がみえる。受験座談会の内容をみると、青山学院中学部から慶應義塾大学や横浜高等工業学校に進学した先輩たちが招かれ、在校生たちと懇談する様子が記されている。本書は、いわば受験指導の一端を垣間見ることができる史料になろう。これまで青山学院のなかで受験についてどのように語られてきたのか。『青山学院九十年史』や『青山女学院史』では、思いのほか受験に関して言及されていない。小稿では、昭和戦前期の青山学院中学部が受験とどのように向き合っていたのかを教員や卒業生たちの言葉を手掛かりに考えてみたい。

青山学院資料センターが所蔵する『青山学報』や青山学院中学部学友会発行の『高潮』などを読むと、受験に関する記事は昭和初年頃からみられるようになる。代表的なものとして「先輩だより」や「先輩の受験記」（『高潮』第17号）が挙げられる。『高潮』の編者は、特集を組むにあたって、卒業生（上級学校への進学者）に対して上級学校の様子、受験勉強の方法、在校生に対する注意、学校に対する注文の四項目について往復葉書を発送した。これに対して、卒業生から多くの興味深い返事が寄せられた。ちなみに彼らの主な進学先を挙げると、第一高等学校、第二高等学校、第七高等学校などのいわゆるナンバースクールや山口高等学校、松本高等学校、山形高等学校、弘前高等学校、静岡高等学校などのネームスクールである。



	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
	巣鴨中	府九中	早稲中	芝中	府二中	青學中	京華中	曉星中	府七中	市二中	府三中	開成中	市一中	麻布中	高師中	府八中	府六中	府五中	府一中	府四中
一高	二	二	三	一	三	四	二	二	六	三	一〇	七	八	一〇	一六	八	八	二七	三七	四一
東高	〇	〇	一	〇	一	二	〇	一〇	二	三	一	〇	一	三	二	二	七	四	三	八
府高	〇	〇	一	一	〇	〇	二	〇	〇	二	一	二	三	二	三	八	五	六	八	一五
浦高	三	二	二	三	〇	一	四	五	六	八	五	一〇	七	五	七	三	一二	一四	五	八
商大豫	〇	〇	二	〇	五	〇	一	〇	一	五	六	七	七	四	四	八	一一	八	一七	一八
商大專	二	一	〇	二	五	三	四	一	三	六	二	三	五	六	〇	四	五	五	七	三
横高商	〇	二	一	一	〇	〇	二	一	一	二	一	〇	〇	〇	〇	一	〇	三	一	一
横高工	〇	二	〇	四	一	五	二	〇	一	〇	四	一	二	三	五	五	二	三	四	一
總計	七	九	一〇	一二	一五	一五	一七	一九	二〇	二九	三〇	三〇	三三	三三	三七	三九	五〇	七〇	八二	九五
昨年總計	一〇	四	一三	一四	一三	一六	一五	二一	二五	三六	三六	二九	二三	三〇	三六	三九	五二	四七	八七	一〇〇

東京の諸中学の上級官立学校入学者数
（『高潮』第32号より）

受験への意識の高まりからか『高潮』第32号に青山学院中学部の進学実績（昭和8年）が掲載されている。

中学部教員安井正男は「我が中学部が私立中学中に於て第五位を占めてゐるのは意を強うするに足ります。〔中略〕たゞ単に真面目でおとなしいだけが中学教育の目的ではありません。総ての点に於て、特に学力に於ても他と競争して敗れない実力を具へた学生であつて欲しいものです。」と述べている。

だからといって、教員だけが躍起になって受験指導を行っていたわけではない。並みいる強豪をおさえ受験を突破した卒業生たちの声を聴いてみよう。青山学院には「勉強すると云ふ気分が見えない。それがよいのかも知れないが上級学校に入りたければその気風をつくることが必要です。」との指摘や、外部の講習会や模擬試験で青山の生徒に会うことは少なく、逆に「八中、麻布、開城……等々の生徒の多いのには驚く位」だったとの感想を漏らす者もいた。なかには「出来ることなら三年位から上級学校に行く人と行かない人と分け、文、理、或は他の専門学校へ行く人を分けて詰込主義でやつて欲しい。其の方が結果に於ては得なのです。」と言い切る者さえいる。彼らは早い段階から自発的に厳しい環境に身を置き受験に備えることを望んでいたのである。

受験記をとおして先輩たちは、後輩たちに何を伝えようとしていたのだろうか。1つは、学問である。受験勉強では断片的な知識の習得に限られる。彼らは高等学校では「相互に密接な関係に於て秩序立てられた精密な知識の系統」としての学問や「人間らしくなる方法を実習」する場という魅力を伝えた。「潑溂たる青年の自由なる生の旋律とも言ふべき時代」を謳歌するには、まず何よりも受験に勝利しなければならない。よく受験勉強は「真の勉強ではない」といわれる。しかし、「試験に合格すると言ふ事は今までより以上の事を学び得るやうになると言ふ事です。より以上の実力を持ち得ると言ふ事です。其れは人格完成上更に一段と上級の段階を踏み出し得ると言ふ事を意味するのです。」と、彼らは述べた。

もう1つは、同窓の集いである。各学校のなかには、同じ中学出身者が集って麻布会、四中会、静中会などを結成し楽しく語り合う姿があった。そのような光景に青山出身者は、「何とも言へぬ淋しさ」を感じていた。いつしか自分たちも青山会を設け、和気藹々と青山の思い出を語り合いたいと思うのは至極当然のことであった。その思いは時期に差はあれども、いくつかの学校で実現している。三田青山会（慶應）、稲門青山会（早稲田）、帝大青山会、府高青山会などが結成された。とりわけ昭和4（1929）年に新設された府立高等学校に進学した先輩たちの言葉にその思いが凝縮されている。青山出身者9名のうち既に3名は帝大に進学し、残りの者もいずれ府高を去る。「我等無き後は誰がこの新興学府に我等の遺志を継いでくれるだらうか。折角努力して学風に織り込んだ青山スピリット、開拓者の精神を誰が維持し、完成してくれるであらうか？我等は鶴首して新しい青山ボーイズを待つて居る。」。ここからは、彼らの溢れる情熱とともに、何としても自分たちの後に続く後輩を確保したいという必死さが伝わってこよう。

青山学院中学部から高等学部へ進む生徒たちを本流とすれば、ほかの上級学校へ進むことを選択した生徒たちは傍流かもしれない。ただ、傍流とはいえ、彼らが青山学院で何を学び、巣立っていったのか。進学先で何を考え、どのような学校生活を過ごしたのか。さらに社会人としてどのように歩んだのか。青山学院との関係は…など大いに興味が湧いてくる。彼らの足跡を学院内外の史料で辿ることは、学院の歴史像を描くうえでも必要な作業だと感じる。これについては、別の機会に考えてみることにする。

出会いの場となった児童雑誌『日曜世界 コドモノトモ』

大学教育人間科学部教授　山本　美紀

1.『日曜世界 コドモノトモ』と所蔵状況

『日曜世界 コドモノトモ』（以下、『日曜世界』）は、1907（明治40）年12月から1924（大正13）年12月にかけて、子供への伝道のために出版された月刊児童雑誌である。2色刷り30ページ以上に及ぶ雑誌形態の本誌の登場は目新しくもあり、その後の日曜学校の活況を背景に販売数を伸ばし、日本だけでなく、朝鮮、台湾、満州など、当時のいわゆる外地までもたらされていった[1]。

本雑誌を創刊したのは、自由メソヂスト教団牧師（当時）であった西阪保治（1883-1970）である。彼は1907年1月に、兵庫県淡路島にある福良教会に着任したものの、伝道不振に悩み、打開策としてクイズ付のトラクト[2]を作った。その小さなトラクトが元となって、クリスマスに集った子供たちへの「お土産」に結実して以降、雑誌としての歩みが始まる[3]。

本誌創刊の背景について、詳細は拙稿「児童雑誌『日曜世界 コドモノトモ』へのアプローチ――青山学院所蔵6誌の目次と解題」[4]に譲るとして、ここに所蔵状況を改めて記しておきたい。現在、所蔵館として確認できるのは、大阪府立国際児童文学館（58冊）、東京大学法学部近代日本法政史料センター（明治新聞雑誌文庫・原資料部）（19冊）、東京神学大学（9冊）、そして青山学院資料センター（16冊）となっている。

青山学院資料センターでは、以前より『日曜世界』を6冊所蔵していたが、この度、前出の上笙一郎の蔵書コレクションが市場に出され、10冊が購入された。このうち、本センターのみが所蔵しているのは8冊であり、資料的価値も高いものである[5]。

2. 内容と構成

『日曜世界』の構成は、1）美しい表紙と扉絵、2）各地の伝道風景や同信の子供達の写真、3）信仰についての説話や童話、4）子供用の賛美歌、5）えばなし〔漫画のようなもの〕、6）聖書に基づく講話、7）信仰者の伝記、8）日曜学校生徒のドキュメンタリー、9）クイズ、10）読者の交流ページ、11）日曜学校の教材（日曜学校研究会編纂）などとなっており、時代によってその構成は変わっていくものの、読物を中心に、読み応えのある内容となっている。現存する各誌に共通した特徴は、「お楽しみの要素」と「日曜学校に行って完成する内容」であること、また、「読者間をつなぐと同時に各地の日曜学校をつなぐもの」となっていたことであろう。これらはすべて、『日曜世界』が、日曜学校へ子供達を誘うトラクトから出発し、その使命を常に意識してきたことによると考えられる。

『日曜世界 コドモノトモ』

例えば「お楽しみの要素」として「懸賞付きのクイズ」があるが、これはトラクトの頃からのものである。トラクトに童話と共に懸賞付きのクイズを掲載し、その答えを教会前に張り出し、受け取り場所を教会にすることで、日曜学

校の生徒が増え始めた体験による[6]。「日曜学校で完成する内容」というのは、例えば第10巻第5号の「黒板画使用日曜講話」と題した、週ごとの日曜学校の教材が挙げられる。これなどは子供向けであると同時に、日曜学校の教師に向けての内容である。教師は雑誌にある黒板画を教室で描いて、子供は雑誌の内容を日曜学校で他の子供達と共に体験し、学ぶものである。このようにして、教派を超えて各地の日曜学校を支援し、つなぐ工夫がなされていた。

3.『日曜世界』と創作賛美歌

上笙一郎は『日曜世界』について、「この雑誌の挙げたもっとも大きな成果は、童話よりも童謡、取り分け＜子ども讃美歌＞であったように思われる。いや、このように言ったのでは足りず、近代日本における＜キリスト教的童謡としての＜子ども讃美歌＞を大成させた――とまで言ってさしつかえないのではあるまいか。」[7]と、子供賛美歌への貢献をたたえる。それは、由木康の起用と、彼と津川主一、大中寅二らとの出会いの場に『日曜世界』がなり得たからである。

第9巻第3号には、由木康の「告白 私は救われたでしょうか」（32-34頁）が掲載されている。次号に続く連載ものであるが、関西学院での津川との出会いは『日曜世界』の読者だった津川が由木の名を、雑誌を通して知っていたのがきっかけだったという[8]。また、山田耕筰の弟子であった大中寅二も、そのような2人と音楽を通して交流をもつようになり、その様子を見ていた西阪が、彼らの手による子供賛美歌の創作へと導いた[9]。

実際、第10巻第5号には、≪ザーカイの歌≫（口語詩）、≪HANA MOROTOMO NI≫（ローマ字花の日の歌）の２編が掲載されているなど、由木にとって活発な発表の場となっていたことがうかがえる。もちろん、他の作家による賛美歌制作も盛んで、創作詩が掲載された後、数巻後に曲が付けられて掲載されることもしばしばあった[10]。

4. おわりに

『日曜世界』は、創刊以来多くの子供達や日曜学校に携わる大人が手にしたものであり、メソジストを中心としたキリスト教信仰に基づく教育活動にとって、貴重な資料である。また、先に見た賛美歌に限らず、竹下夢二が担当したこともある美しい表紙や、挿絵、文芸作品など、子供向けとはいえその内容は本物志向であり、多くの才能ある作家たちの活動の場であり、出会いの場となっていた。

読者をつなぎ、作家をつないだ『日曜世界』の研究は、まだ端緒についたばかりである。だが、小さな辛子種であった『日曜世界』が大樹となる過程は、そこから巣立っていった様々な人たちの成長と共に、出会いとなった「場」の重要性を示すものとなろう。同時に、青年牧師が自らの限界から神にゆだねて始めた業は、「むなしくはわたしのもとに戻らない」（イザヤ55：11）と約束された方の真実を証明するものでもある。

1　増山初子「西阪保治とその仕事」日本児童文学学会，富田博之，上笙一郎編『日本のキリスト教児童文学』（国土社，1995年）所収，130-137頁。

2　トラクト（tract）（宗教・政治上の）パンフレット。（松村明編『スーパー大辞林　3.0 Ver.4.2.4』三省堂，2008。）

3　創刊号は今のところ確認できないが、西阪による創刊号についての記述は以下の通り。「約一年間に時々新聞に挟んだ謄写版刷のビラは、『日曜世界』となって呱々の声をあげたわけである。菊判（A5版）三六ページ、表紙二色刷、挿絵入り、定価二銭 一九〇七年（明治四〇年）一二月二五日発行。」（西阪保治「Ⅱ 日曜世界社とその時代」『日本キリスト教出版史夜話』新教出版社, 1984年，39-40頁。）

4　山本美紀「児童雑誌『日曜世界 コドモノトモ』へのアプローチ――青山学院所蔵6誌の目次と解題」青山学院大学教育学会紀要『教育研究』第65 号, 2021 年，133-153頁。

5　青山学院資料センターのみの所蔵巻（2021年12月）：第６号４巻（1913年３月），第７巻 第５号（1914年３月），第９巻３号（1916年２月），第10巻５号（1917年４月），第10巻９号（1917年９月），第16巻６号（1923年６月），第16巻10号（1923年10月），第16巻11号（1923年11月）

6　西阪保治「Ⅱ 日曜世界社とその時代」『日本キリスト教出版史夜話』（新教出版社, 1984年）所収，35-48頁。

7　上笙一郎「関西児童文化史　稿・34『日曜世界』と子ども讃美歌（上）」『日本古書通信』第885号，2003年４月号，17頁。

8　上笙一郎「関西児童文化史 稿・35『日曜世界』と子ども讃美歌（下）」『日本古書通信』第886号, 2003年５月号, 10-11頁。

9　同前。

10　斎藤潔 詞，津川主一 曲，《天軍頌栄》『日曜世界』第16巻11号（1923年11月），45-47頁。

資料センター利用状況等（2021 年度前期利用状況）

※新型コロナウイルス感染拡大に伴う学院施設入構制限措置により、展示ホールについては学内関係者に限り公開中

1. 月別利用者数

		4 月		5 月		6 月		7 月		8 月		9 月		計	
		前年度	今年度	前年度	今年度	前年度	今年度	前年度	今年度	前年度	今年度	前年度	今年度	前年度	今年度
展示見学者数		15	66	0	9	0	23	8	134	0	3	14	10	37	245
資料閲覧者数		0	3	0	2	3	5	0	2	0	3	1	4	4	19
閲覧者の区分	本学学生	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3
	現教職員	0	2	0	1	3	3	0	1	0	2	1	2	4	11
	旧教職員	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	校友	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	他大学教員	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	牧師	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	一般	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	3
利用の目的	教会史編集	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	学校史編集	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0
	著述・論文作成	0	0	0	0	3	0	0	0	0	2	0	1	3	3
	伝記資料調査	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
	記録類の調査・研究	0	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	1	0	5
	その他	0	2	0	1	0	4	0	0	0	1	0	2	0	10
資料の種類	青山学院史関係（AA）	0	3	0	0	2	1	0	1	0	2	1	4	3	11
	メソジスト教会関係（B）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2
	英語・英文学関係（旧 F）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	明治期キリスト教関係（旧 G）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	一般分類図書	0	0	0	2	0	1	0	0	0	1	0	0	0	4
	その他	0	0	0	0	1	3	0	1	0	0	0	0	1	4

※ 利用の目的、資料の種類は重複回答あり

2. 月別レファレンス件数

		4 月		5 月		6 月		7 月		8 月		9 月		計	
		前年度	今年度	前年度	今年度	前年度	今年度	前年度	今年度	前年度	今年度	前年度	今年度	前年度	今年度
件数		1	10	2	8	7	14	7	6	5	8	11	16	33	62
質問者の区分	学生	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	現教職員	1	8	2	4	2	6	4	1	3	3	5	6	17	28
	旧教職員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	0
	校友	0	1	0	0	0	1	0	2	0	1	1	4	1	9
	一般	0	1	0	3	5	7	3	3	2	4	3	6	13	24
質問内容	文献所蔵調査	1	3	0	4	3	2	0	3	0	4	6	4	10	20
	写真所蔵調査	0	1	1	1	2	2	1	1	1	0	1	3	6	8
	事項調査	0	5	1	3	1	10	6	1	2	3	4	8	14	30
	その他	0	1	0	0	1	0	0	1	2	1	0	1	3	4

3. 日誌抄

2021年4月

・新任職員研修のためキャンパスツアー及び展示ホール案内
・大学附置青山学院史研究所の事務業務打合せ
・全学院事務連絡会に出席
・OJT担当者研修に出席
・美術品の管理取扱に関する説明会に出席
・藤枝市役所街並み景観課、来室及び見学
・AGUデジタルアーカイブプロジェクトによる貴重書スキャン

5月

・法人へ『青山学院150年史資料編Ⅱ』刊行報告
・自動火災報知設備調査
・ミーティングルーム什器、納品設置
・展示検討小委員会開催
・鎌倉国宝館、来室
・メール誤送信抑止ツール導入説明会に出席
・全学院事務連絡会（メール形式にて開催）に出席
・資料センター運営委員会開催

6月

・大学附置青山学院史研究所の事務業務打合せ（オンライン形式にて開催）
・文学部史学科「フレッシャーズ・セミナー」受講生、見学のため来館
・常設展示、展示替えのため展示室5・6閉室（6月9日～7月3日）

・150年史編纂本部会議事前打合せ
・空調機械室点検
・青山学報編集委員会に出席
・大学附置青山学院史研究所第1回運営委員会に出席
・大学図書館蔵書点検打合せに出席
・全学院事務連絡会に出席
・空気清浄キット設置

7月
・初等部3年生オリエンテーリングのため来館及び見学
・150年史編纂本部会議に出席
・特別案件予算ヒアリングに出席
・全国大学史資料協議会東日本部会第123回研究会（オンライン形式にて開催）に出席
・『Aoyama Gakuin Archives Letter』24号発行
・公開セミナー「大学におけるデジタル・レコードキーピング―シドニー大学の挑戦」（オンライン形式にて開催）に出席

8月
・常設展示、展示替えのため閉館（8月2日午後）
・貴重書室不活性ガス消火設備点検
・照明器具及び分電盤交換工事

9月
・照明器具及び分電盤交換工事の消防検査
・空調機械室、漏水点検
・総合防災訓練に参加
・BnF×DNPミュージアムラボ第2回展「これからの文化体験」を見学
・臨時全学院事務連絡会に出席
・青山学報編集委員会（メール形式にて開催）に出席
・全学院事務連絡会（オンライン形式による開催）に出席
・大学附置青山学院史研究所シンポジウム打合せ（オンライン形式による開催）
・鎌倉国宝館、資料借用のため来室

2021年度前期受入れ 資料

（学内部署からの資料は除く）

寄贈（敬省略、受入順）

一般財団法人山縣記念財団
●『日本の海のレジェンドたち』山縣記念財団80周年記念出版編集委員会編　海文堂　2021年3月28日

髙橋まゆ（校友の親族）
●藤谷昭二、妙子夫妻結婚式写真　於：本部礼拝堂　1955年10月30日（**写真①**）
●『投影』Ⅱ・Ⅲ　青山學院文芸部・創作部（男子専門部文芸部・女子専門部創作部）1949年3・7月
●青山学院女子専門学校入学試験合格通知および「青山學院復興寄附金受領證」等　1949年

Springer Nature
●『The History of Modern Astronomy in Japan』Tomokazu Kogure　Springer, 2021

藤井多恵子（校友）
●『チップと犬』メノッティ作曲　藤井多恵子訳詩　ドレミ楽譜出版社　2021年3月30日（**写真②**）

佐藤晟雄（校友）
●「わたしのスケッチブック」(21) 佐藤晟雄著　2021年4月23日

青山学院女子短期大学同窓会
●「青山学院女子短期大学同窓会会報」第47春号　2021年4月25日
●「青山学院女子短期大学同窓会会報」第47秋号　2021年10月1日

片瀬一男
●『東北の女子ミッション教育の社会史』片瀬一男編　東北学院大学女子ミッション教育研究会　2021年2月25日（**写真③**）

有限会社ゴッドキッズ
●NHK BSプレミアム『ダークサイドミステリー　超能力の謎を解明せよ！～千里眼事件の光と闇～』MP4動画データ　2021年4月8日放映

中川卓郎（校友）
●「グリーンハーモニー OB NEWS」 No.63　2021年4月

山本美紀（大学教育人間科学部教授）
●「日本賛美歌学会設立20周年記念誌　2001～2021」（オンライン特別講演会映像記録DVD付）　日本賛美歌学会　2021年3月（**写真④**）
●「日本の讃美歌史と別所梅之助（上）・（下）」荻生田明著『礼拝・音楽研究会報』No.19・20　礼拝・音楽研究会　1995年

青山学院大学体育会山岳部OB・OG会
●「緑ヶ丘通信」No.126　青山学院大学山岳部OB・OG会　2021年4月20日（**写真⑤**）

今橋映子
●『近代日本の美術思想　美術評論家・岩村透とその時代』抜粋　今橋映子著　白水社　2021年4月

青山学院高等部同窓会
●「青山学院高等部同窓会報」80号　2021年6月15日

日本評論社
●「史料の窓」日向玲理（大学青山学院史研究所助手）著『法律時報』2021年93巻8号　通巻1166号　日本評論社　2021年7月1日
●「史料の窓」佐藤大悟（大学青山学院史研究所助手）著『法律時報』2021年93巻9号　通巻1167号　日本評論社　2021年8月1日

鈴木保美（校友）
●青山学院初等部運動会DVD　1958～1960年撮影
●青山学院初等部運動会（一年、二年）8mmフィルム　1958年、1959年10月9日撮影
●青山学院初等部運動会（三年）8mmフィルム　1960年10月撮影
●「第16回湘南邸園文化祭2021」ガイドブック　2021年

庄司一幸
●『吉田菊太郎の生涯と業績および吉田家に連なる信仰に生きた人々』庄司一幸著　2021年6月28日
●『郡山教会百二十七年史（1）』庄司一幸著　2021年6月22日

青山学院大学文学部英米文学科同窓会
●会報「Aoyama Sapience」第45号　青山学院大学文学部英米文学科同窓会　2021年7月15日

戸田隆也（校友・職員）
●昭和四年度青山学院高等女学部入学案内　1929年（**写真⑥**）
●青山学院高等女学部学則　1927～1933年頃
●青山学院高等女学部専攻科入学願　1929年頃
●社団法人青山学院校友会会員名簿　1934年12月

松岡正樹
●「讃美歌第四百五十四番　日本メソヂスト教会宣教師F・H・スミス」SPレコード　伴奏：大島まき子　オリエントレコード　制作年不明（**写真⑦**）

日向玲理（大学青山学院史研究所助手）
●「青山学院における年史編纂事業について」小林和幸(大学青山学院史研究所所長)・日向玲理著『歴史学研究』No.1013　歴史学研究会　2021年9月15日

木村匠（校友・職員）
●青山学院大学・青山学院女子短期大学　青山祭パンフレット　1962（創立88周年）　1962年（**写真⑧**）
●青山学院大学第二部第四回卒業式次第　1957（昭和32）年3月24日
●女子短期大学長向坊長英から秋山妙子宛封筒　1950（昭和25）年8月30日

公益財団法人ウェスレー財団
●公益財団法人ウェスレー財団　団体紹介冊子　2021年

青山学院大学電気電子工学科同窓会
●「青山学院大学電気電子工学科同窓会報」第25号　2021年9月

鎌倉国宝館
●特別展：生誕150年記念「間島弟彦と黎明期の鎌倉国宝館～その知られざる物語～」ポスター、チラシ　2021年（**写真⑨**）

他大学・学校
●年史・紀要類

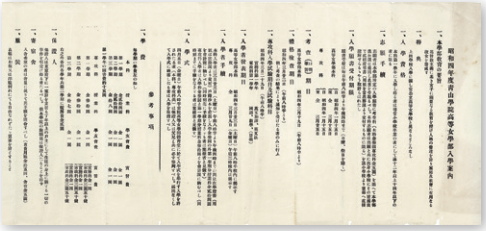
写真①　藤谷昭二・妙子夫妻結婚式写真

写真②『チップと犬』

写真③『東北の女子ミッション教育の社会史』

写真④「日本賛美歌学会設立20周年記念誌」

写真⑤「緑ヶ丘通信」No.126


写真⑥　昭和四年度青山学院高等女学部入学案内

写真⑦「讃美歌第四百五十四番」SPレコード

写真⑧　青山祭パンフレット　1962年

写真⑨「間島弟彦と黎明期の鎌倉国宝館」チラシ

青山学院資料センター利用案内

新型コロナウイルス感染症感染再拡大防止のため、学院施設入構制限措置が継続されておりますので、以下にご案内しております展示ホールの見学及び資料閲覧につきましては本学の教職員・学生・生徒に限定させていただいております。ご理解を賜りますようお願い申し上げます。
なお、最新の情報につきましてはホームページにてご案内いたします。

●展示ホールの見学
青山学院史関係資料の常設展示を無料にて一般公開しています。
公開時間　月～金曜日　▼9：30～17：00（入館は16：30まで）
土曜日　▼9：30～13：00（入館は12：30まで）

●資料閲覧
青山学院史、明治期キリスト教関係資料などを公開しています。特定の研究目的を持って閲覧ご希望の方は、電話・FAX・メールにてご連絡ください。

閲覧時間（いずれも昼休み11：30～12：30）
月～金曜日　▼9：30～17：00
土曜日　▼9：30～13：00

●休室日
日曜日・国民の祝日・年末・年始・その他学院が定める休日
詳細はホームページのカレンダーにてご確認ください。

●問い合わせ
〒150-8366　東京都渋谷区渋谷4―4―25　間島記念館2階
青山学院資料センター
TEL　03（3409）6742
FAX　03（3409）8134
メールアドレス　ag-archives@aoyamagakuin.jp
青山学院ウェブサイト内に資料センターのページがあります。こちらもご覧ください。
https://www.aoyamagakuin.jp/history/mcenter/index.html

資料センター運営委員

院長（職務上）	山本与志春
常務理事１名（職務上）	楯　香津美
学院宗教部長（職務上）	伊藤　悟
大学図書館長（職務上）	野末俊比古
青山学院史研究所長（職務上）	小林　和幸
大学　教員１名	岩井　浩人
高中部（高）　教員１名	佐藤　隆一
高中部（中）　教員１名	森田久美子
初等部　教員１名	小林　寛
幼稚園　教員１名	石井　京子
総局長（職務上）	石黒　隆文
資料センター事務長（職務上）	岩本　智実

資料センタースタッフ

資料センター事務：
専任　3名
パートタイム　2名
（週4日：1名、週5日：1名）
『青山学院150年史』編纂業務：
大学附置青山学院史研究所

Aoyama Gakuin Archives Letter
青山学院資料センターだより　25号

青山学院資料センター編・発行
2022年1月20日発行

印刷：三美印刷㈱
500部